

論壇

有望な若手音楽家を輩出

先日、京都で行われた小澤征爾氏の指揮によるオペラを鑑賞した。演奏するオーケストラのメンバーの大半は、若手の音楽家の育成のために集められた若い音楽家の卵であり、この育成プロジェクトを京都の企業のロームが支援する。そのお披露目のコンサートであるが、著名な歌手なども参加して、大変に素晴らしい演奏会であった。

小澤氏は長い間、若手音楽家の育成に積極的に関わってきた。企業の創業者がかつては音楽家を目指したロームは、そうした活動を

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

支えてきた。このプロジェクトから多くの有望な音楽家が育っていると聞いている。

音楽のような分野で若手を育成するためには、こうしたエリート養成プログラムの意義は非常に大きい。同世代の優れた演奏家と切磋琢磨することができると、世界的な一流音楽家から直に指導を

と思うが、これがより一般的な教育でのエリート養成と言いつつ、特定の人だけを鼻息にするので好ましくないと考える人は少なくない。教育とは平等でなくてはいい。教育とは特定のエリートを養成するようなプログラムは好ましくないと考えるのだ。

しかし、もし音楽でエリート養成に意義があるとすれば、美術でも、科学でも、体育でも、エリート養成の意義はあるはずだ。科学分野で社会をリードするような人材を育てなければ、若い年齢からそれなりの教育環境を提供することが必要であるはずだ。全ての子供に一律に適用される指導要領で

エリート養成への支援

受けることができるからだ。既存の学校制度や音楽大学を超えて、こうしたエリート養成プログラムの果たす役割はますます大きくなっていくのではないだろうか。

ところで、音楽分野でのエリート養成プログラムと言いつつ、それに抵抗感を持つ人は少ないだろう

はなく、もっと才能を伸ばすような教育環境が提供されることが好ましい。

音楽の分野では小澤氏のような人がそうした若手育成に積極的に関与しているが、同じような活動がより多くの分野で提供されるような社会を目指すべきであろう。教育とは、一方で全ての人に平等に与えられるものであると同時に、他方でそれぞれの個性や得意分野を伸ばすものでなくてはいいからだ。

分野拡大へ寄付の活用を

残念ながら、政府が管轄する教育システムの中では、こうしたエリート養成の教育を実行することは難しい。国民の税金を使った教育制度は、万人に対して平等でな

くてはいけなからだ。だから、小澤氏が主催しているような民間による教育支援の制度の存在が重要となる。

社会的に意義のある活動を行う組織に寄付をすると、税の控除が受けられる制度がある。こうした制度を有効に活用して政府だけではできない社会活動を活性化させることが期待されている。日本では、まだこの制度が十分に活用されていない。制度に問題があるという指摘もある。日本の将来を支える若者の育成の、社会的な意義は大きい。小澤氏やロームが音楽の世界でやっているのと同じような活動が、より多くの分野で広がっていく、そうした寄付の活用を真剣に考える必要がある。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。